

つり大すき

御油小・3 徳重 縁思

「わあ。父さんたいへん。大きい魚が。」

「どうした。」

「つれてる。」

ぼくは、つりがきらいだ。なぜかというとお父さんとお兄ちゃんはつりを始めると、話しかけてくれない。つれないのにずっとつりをしている。何時間も。だからぼくはひまだ。ひますぎて川の石で遊んでいる。川を見ながらおかしを食べている。でも、時間がぜんぜんすぎてくれない。だからきらいだ。

お兄ちゃんがけいりゆうづりがすきなので川によく行く。ぼくの遊びあいては石だ。でも、今日はかん理つり場に行った。たくさん魚が泳いでいるのが見えた。

「よし、今日はぼくもやってみよう」

と思った。お父さんに、ぼくもやりたいと言ったら、よろこんで教えてくれた。

お兄ちゃんのすきなつりは、エサではなく、ルアーでつる。お父さんのつりの箱の中には、まるで本物の魚のようなルアーがたくさんある。ぼくは、いろんな色のルアーの中で、うすピンク色のルアーをえらんだ。

「これが一番つれそう。」

ぼくは、そう思った。お父さんにルアーをつけてもらい、シュツと

投げてみた。

「えにし、投げ方上手だな。」

とお父さんが言ってくれて、ぼくはうれしくなった。リールをまいて、つれてない。投げては、まいてのくりかえし。もう一度投げてみると、

「あれ、さつきとちがう。重たい。」

「父さん、つれたー。」

ぼくは、さげんだ。大きなニジマスだ。うれしかった。楽しくなった。

「家にもって帰ってみんなで食べよう。」

お父さんが言った。

お兄ちゃんがたくさんつったので、今日は大りようだ。家に帰って、お父さんがさばいて、お母さんがしおやきやフライにしてくれた。だれが上手に食べるか大会をした。一いがお父さん。二いがぼく。三いがお母さん。ビリがお兄ちゃん。お父さんのお皿には、ほねしかなかった。

「マンガに出てくる魚みたい。」

とみんなでわらった。

「魚にもいのちがあるんだから、感しやしてのこさず食べないといけないんだよ。」

とお父さんが言ったので、みんなのこっているところはなにかかくにんしてきれいに食べた。自分でつった魚はとくべつにおいしかった。

「つりもいいなあ。楽しいなあ。」

とぼくは思った。

今まで、ぼくはつりがきらいだったが、ちよつとすきになった気がする。はじめてつれたときの感かくがわすれられない。魚とぼくのたいけつ。ひっぱったり、ひっぱられたりのくりかえしをしながらかくとうする。魚がだんだん近づいてきて、見事あみにチャツチ。ぼくの方だ。このしゅんかんが気持ちいい。

つりはおくが深いらしい。お父さんやお兄ちゃんはいつも本やインターネットで調べている。つり道具屋にもよく行く。これからはぼくもいつしよに行つて、つりのことを勉強しよう。そして、つり名人になれるように、たくさんつりをしたいな。